

妊娠中の高血圧

その後も注意を

弘大 リスク調査

妊娠時に血圧が高めだった女性は、中高年になると生活習慣病の高血圧症や脂質異常症になりやすい傾向があることが、弘前大学院医学研究科産科婦人科学講座の研究で分かった。妊娠高血圧症候群（旧妊娠中毒症）だった女性は心筋梗塞や脳卒中などを発症しやすいことが知られているが、研究グループは同症候群でなかった女性でも「妊娠中の拡張期血圧（最低血圧）が70 mmHg以上なら生活習慣病のリスクが高い可能性がある」と指摘している。

（鎌田秀人）

中高年で生活習慣病傾向

研究は、弘前大などが弘前市若木地区で毎年行っている「若木健康増進プロジェクト」の大規模健診の一環。研究成果は、欧州の医学誌にも掲載された。

健診に参加する女性に母子手帳の持参を呼び掛け、妊娠高血圧症候群でなかった女性計432人を調査した。

妊娠中は体内の血液量が1・5倍に増えるなど体の状態が大きく変化し、人によつては病気になるりやすくなるという。飯野助教は「女性にとつて妊娠は、生活習慣病のなりやすさを把握で

きる負荷テストのようなもの。妊娠中の血圧は、将来的な生活習慣病の発症リスクを予測するのに有効な指標」と指摘する。

母子手帳に記録された妊娠時の血圧と、健診時の高血圧症や脂質異常症の関連を統計的に分析した結果、同症候群でなかった女性でも、妊娠12〜42週の拡張期血圧の平均値が高いほど高



飯野 香理助教
グループは、大規模

同講座の飯野香理助教(37)によると、研究グループは、大規模

血圧の平均値が高いほど高血圧症や脂質異常症を発症するリスクが高まる傾向があった。例えば拡張期血圧の平均が70 mmHgだった女性に比べ、高血圧症の発症リスクが1・7倍、脂質異常症は1・55倍だった。

血圧症や脂質異常症を発症するリスクが高まる傾向があった。例えば拡張期血圧の平均が70 mmHgだった女性に比べ、高血圧症の発症リスクが1・7倍、脂質異常症は1・55倍だった。

飯野助教は「該当する人は、生活習慣の是正など病気の予防を心がけて」と呼び掛けている。